

歴史資料を活用し、共感と意思決定で

歴史を捉える授業開発

—「承久の乱」を当事者の視点から考察する学びを通して—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 言語・社会科学系（社会）

藤井 勇希

社会科の究極のねらいとされている「公民的資質」の育成について、「市民が社会的、政治的な事象に対し、意思を示し、その意思を行動に移すことができること」と解釈し、本研究では「公民的資質」の育成を目指すため、歴史資料を活用し、共感と意思決定で捉える授業実践に取り組んだ。

「承久の乱」を題材とし、当事者の視点から考察した結果、生徒が歴史的エンパシーを働かせることができれば市民性（公民的資質）の一部を育成することにつながると明らかになった。また、これまで歴史を第三者の視点で見ていた生徒も「自分だったら」と当事者の視点で考えることで過去を過去として捉えるだけでなく、過去と現在とを関わらせることで、客観的な視点で歴史を学ぶことから少し抜け出すことができた。一方で当事者の気持ちに立って考える事ができない生徒もあり、資料の提示や内容、当事者の気持ちを生徒にどう落とし込ませるかその手立てについて課題が残った。社会科を通して公民的資質を生徒が身につけるために、本研究をきっかけとし今後も追究していきたい。